

論文審査結果報告書

論文提出者氏名

宮嶋隆一郎

学位論文題目

咀嚼筋障害を有する顎関節患者に対するスタビライゼーションスプリント療法の効果 - 2週間経過観察後

審査委員（主査）教授 細川隆司 印

（副査）教授 吉岡 泉 印

（副査）教授 富永和宏 印

論文審査結果の要旨

本論文は、咀嚼筋痛を有する顎関節症患者に対するスタビライゼーションスプリント療法の効果として、疼痛、下顎運動および咬合状態がどのように変化するかについて検討したものである。

被験者は、本学附属病院顎関節症科を受診した患者のうち、顎関節症I型と診断され、実験の主旨を理解し承諾を得た8名としている。各被験者に対して上顎型スタビライゼーションスプリント(stabilization splint:SS)を製作し、SS装着前後における前方および側方限界運動距離、咬合状態、疼痛のvisual analogue scale (VAS)、咬筋・側頭筋における圧痛閾値(PPT)を検討項目とした。データ採取は、SS装着直前およびSS装着2週間後に行い、計測結果についてはpaired t-testおよびWilcoxonの符号順位検定を用いて比較検討したものである。

得られた結果として、SS装着前後においては、前方運動および疼痛側における側方限界運動距離は統計学的に有意に増加していた。咬合力、咬合接触点数、咬合接触面積は、いずれも装着後に減少傾向を示していたが、有意差は認められなかった。VAS値は、4項目のうち、3項目に装着後、有意な減少が認められ、PPTは、装着後に有意な上昇が認められていた。

以上の結果から、咀嚼筋障害を有する患者に対しSS療法を行うことにより、筋痛が緩和され、下顎運動距離が長くなることがわかり、この変化に伴い、咬合状態も変化することが示唆された。

本論文は、咀嚼筋痛を有する顎関節症患者に対するスタビライゼーションスプリント療法の有効性を明らかにする上で重要な知見を示すものと考えられた。また、審査会において主査および2名の副査より、研究倫理、研究方法、研究結果の臨床的意義などについて試問したところ、概ね適切な回答を得た。以上の論文審査の結果より、審査委員は全員一致で宮嶋隆一郎氏提出の本論文を学位申請主論文として価値あるものと認めた。